

日本農業の今と国際耕種の関わり方

第4回：地域の中での研修 ～自然塾寺子屋の活動と地域連携(群馬県甘楽町)～

前号では、岡山県牛窓地区における生産者グループの活動と地域連携について紹介し、今後の取り組みとして新規就農希望者の応援活動や、海外からの研修員や青年海外協力隊（JOCV）候補生の派遣前研修等への関わりの可能性を示した。これと同じ観点から今回は、群馬県甘楽富岡地域においてこうした活動をすでに実践しているNPO法人「自然塾寺子屋」を訪問しているというお話をお話をうかがった。

「自然塾寺子屋」では派遣が決まった協力隊員候補生の技術補完研修や海外からのJICA研修員受け入れ事業を実施している。こうした研修における大きな特徴の一つは地元農家や農協との連携である。研修実施にあたっては、「寺子屋」理事の熱心な働きかけに応える形で、JA甘楽富岡の青年部部長が音頭をとって地元農家に研修受け入れの協力を求めた。協力隊員の技術補完研修では、村落開発普及員では3週間、野菜隊員の場合は約6ヶ月の間、受け入れ農家の元で農作業を手伝いながら、地元にとけ込んで活動することで、派遣先で行う協力隊活動に有益な技術、知識やコミュニケーション力を養っていく。寺子屋での研修の特色は、実践に重きを置いている点である。PRAやRRAにしても座学ではなく、農家と一緒にお茶を飲んだり草取りをしたりしながら話を引き出すといった体験を積み重ねる。農家にとって隊員の受け入れはマンパワーとして使えるだけでなく、新たな「家族」の一員が増えることによって、日々の生活に新たな刺激を受けたり、家族で話し合う機会が増加するといった+の効果もある。

「自然塾寺子屋」は「ちびっこを元気に」をめざして2001年に任意団体として設立され、環境教育、青少年育成、国際協力を活動の三本柱として2003年にNPO化された。「寺子屋」の特徴の一つは、その活動が地域によって支えられ、そして活動の輪が地域全体に少しずつ広がっていることである。こうした活動の中から、過去に研修生を受け入れてもらった農家さん達を集めて、受け入れ組織の強化を行おうという動きが起こり、「甘楽富岡農村大学校」が2008年9月に設立されることとなった。これまでのJICA研修受け入れに加えて、Uターン・Iターン等による就農希望者に対する研修の場を提供しようという動きもある。このような活動が、今後さらに農家同士の横のつながりを強化したり、地域の活性化のためにお互いが協力しあえる組織作りにつながるものと考えられる。

「寺子屋」を中心とした活動は、国際協力を巻き込んだ形で地域の活性化をうまくやっている事例だと思われるが、基本的には寺子屋や農協のスタッフといったキーパーソンがリーダーとなって活動を広げる原動力になってきたと考えられる。また受け入れ農家の存在や、人と人とのつながりも重要である。これはキーパーソンとのつながりのみならず、キーパーソンらと地域の人たちとのつながりや、研修生を受け入れる農家の家族の協力とつながり等々である。さらに、寺子屋の活動が地域にとけ込むために、そこに住むことによって日常的な関係を構築し、信頼を醸成してきた点も見のがせない。今後の関わり方としては、地域農業の振興と活性化への貢献のため、国際耕種が間を取り持って、甘楽（群馬）、牛窓（岡山）、里美（茨城）をつなぐことによってお互いが知り合い、情報の共有を行い、そこから共に学んだり、将来的には連携して活動することも考えられる。そのような活動を通して、今後国際耕種が担える社会貢献のあり方を考えていくべきであろう。



自然塾寺子屋の概観



名物・下仁田ネギの畑



自然塾寺子屋の活動内容の聞き取り